

◆第2回◆

「現代と親鸞」公開シンポジウム

生まれることを肯定／ 否定できるのか？ —反出生主義をめぐる問い—

開催趣旨

親鸞仏教センター嘱託 中村 玲太

2020年10月24日（土）に第2回「現代と親鸞」公開シンポジウムを開催した。さまざまな専門分野の方をお呼びし、個々の立場からその苦闘や将来への課題等を問題提起として語っていただく「現代と親鸞の研究会」を開催してきたが、それをより交流・対話の場が開かれることを目的として開設されたのが本シンポジウムである。

本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大に鑑み、オンラインリモート会議システムを使用してのシンポジウム開催であった。総計150名近くの方にご参加いただき、オンライン上で哲学、宗教学、親鸞教学からの問題提起、それに応答する白熱した議論となった。

テーマは、「生まれることを肯定／否定できるのか？—反出生主義をめぐる問い」。「生まれてこなければよかった」、仏教学の立場として、こうした問いを「ただの愚痴であって、意味がない」（佐々木閑「釈迦の死生観」、『現代思想』2019年11月号、161頁）とする見解もあるが、たとえ愚痴であっても—愚痴だからこそ、一つの凡夫の在り方が如実に現れていると見ることもできる。愚痴を抱えずにおれないのが我々凡夫ではないか、そう淡々と生老病死の苦しみに向き合えない存在ではないのだろうか。こうした問いを含め、本テーマを掘り起こすことで見えてくるものがある。我々人間の在り方、そして認識の限界、生命をめぐる宗教的言説の魅力と危険など。これらを多角的に検討した問題提起の一端を報告する。



◆問題提起とコメント

I

生まれることの悪と、 生み出すことの悪

青山 拓央（京都大学大学院人間・環境学研究科准教授）

新たな人間が生まれてくることを肯定したい人にとっても、そうでない人にとっても、狭義の反出生主義には見るべき価値がある。ここで言う「狭義の反出生主義」とは、生まれてくる



人間当人にとっての苦しみに配慮し、新たな人間を生み出す（意図的に作り出す）ことを避けるべきだという倫理的主張である。その主張は、論脈によって大きく二つに分けられるが、そのなかには、新たな生の（ほとんど）すべてを否定する立場だけでなく、新たな生の多くを肯定しながら生み出すことのすべてを批判する立場も含まれている。

以上をふまえたうえで私は、新たな人間を生み出すことは倫理的に無垢だと言いがたいものの、そのことは、出生をめぐる実践の在り方を一意的に規定しないことを示したい。他者に危害を与えかねない状況を意図的に作り出すことと、そのような他者そのものを意図的に作り出すことを区別したとき、後者は「避けるべき罪」、「背負うべき罪」、あるいは「奇跡」としての側面をもつのであり、そして私たちは実践のなかで、そのいずれかを引き受けていく。新たな生への肯定や否定は、この実践を後追いつことで具体的な内実を得ていくのであり、一般化された肯定や否定が実践につねに先立つわけではない。

II

生のトータルな肯定は可能か —ショーペンハウアーとニーチェから—

竹内 綱史（龍谷大学経営学部准教授）

本発表では、「ショーペンハウアーは反出生主義者なのか」という問題と、「ニーチェはショーペンハウアーを批判して生のトータルな肯定を達成できているのか」という問題を扱った。



ショーペンハウアーは基本的に弱い (= 価値論的) 反出生主義者ではあるものの、強い (= 道徳的) 反出生主義者ではない。ただし、彼の倫理学の基礎である共苦〔同情 (Mitleid)〕が世界全体の苦しみを認識できることから、強い反出生主義を基礎づけることも可能かもしれず、また、人間の最高の境地とされる「意志の否定」が世界全体の目的とも語られることから、その目的達成のために人間を生み出すことを奨励する立場を彼がとっていると解釈することもできる。

一方ニーチェは、「この世は苦しみに満ちている」というペシミズムをショーペンハウアーと共有しているものの、だからこそこの世は生きるに値するという結論を出そうとする。そのためにニーチェは共苦道徳を激しく批判したうえで、苦しみに内在的価値を見出す道と苦しみに意味を見出す道を探るが、どちらもまだ足りず、時々ほめかされる「各々の存在が各々において常に既に自己肯定している」という一種の存在論的ヴィジョンによってこそ、生のトータルな肯定に一番近づいているように思われる。



「生命讃仰」言説の落とし穴 —親鸞思想を通して—

難波 教行 (真宗大谷派教学研究員)

生命を讃仰する言説は、世の中に溢れ、ときにそれは宗教的言説という形をとって現れる。たとえば重度の身体障害があるといった、苦難に満ちたと映る生であればあるほど、そのような言説は宗教性を帯びているかのごとく発せられ、生命への肯定を迫ってくる。しかし、生まれたことを無条件に肯定 (讃仰) する言説は、生まれたことを否定する実感を、むしろ強めることがあるのではないだろうか。



上述の問題意識をもつとき、想起されるのは、幼い頃の病によって手足の切断を余儀なくされ、親鸞思想に親しんだ女性——中村久子氏 (1897 - 1968) の言葉である。氏の言葉を取りあげること、「生命讃仰」言説の陥りがちな落とし穴を探つてゆく。そしてそうした言説が、かえって生命を否定せざるを得ない状況を生み出している事実、無自覚かつ無責任であることを確認する。こ

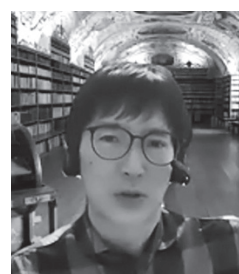
の問題点は、ロングフル・ライフ訴訟、ならびに相模原障害者施設殺傷事件に通ずるものである。

親鸞思想に照らせば、人間が生命を肯定したり否定したりする際の、ぬぐいきれない身勝手な価値判断と、その問題点を明らかにする仏のまなざしが見えてくる。親鸞思想を通すことで、仏によって生命やその在り方が「否定／肯定」されるということはあっても、人間が「肯定／否定」することには危うさがあることが明らかとなるにちがいない。

コメント

コメンテーター 加藤 秀一 (明治学院大学社会学部教授)

「生まれることを肯定／否定できるのか」という問いは、共通の問いに対する答えが論者によって分かれるという種類の問いではない。それは、そもそもそれが何を意味する問いなのかということ自体をめぐって議論が錯綜し続けるような、それほど根源的な問いであろう。今回のシンポジウムを通して、私はそのような思いを新たにしました。



青山氏は、人を生むこと、すなわち他者を意図的につくりだすことに「罪」が含まれる可能性を認めつつも、それは通常の法の下での他者危害とは別の次元にあるとする。私は後半には賛成だが、「生むこと」がいかなる意味でも「罪」ではない可能性をもう少し探ってみたいと思う。竹内氏の報告からはショーペンハウアー哲学の意外な「肯定性」を学ぶことができたが、なぜそれほどまでに「苦」に拘泥するのかという素朴な疑問は残った。これは仏教思想にも繰り返し向けられるべき問いだろう。難波氏による、「生命讃仰」言説の両義性をめぐる迷い (と私には思われるもの) の吐露を受け止めながら、私はユダヤ教・キリスト教における「苦難」をめぐる思想史と突き合わせることで自分なりに掘り下げていきたいと思った。

このように、私は今回のシンポジウムでの議論から自分の問いを見定めるための多くの手がかりをえることができた。参加者のみなさんも同様であれば嬉しく思う。

※コメント後、他の参加者を交えた全体討議を行った (進行：中村玲太)。